

定期上映会 戦傷病者の証言

当館では、戦場での負傷等により多くの苦勞を抱えながら生きてきた戦傷病者とそのご家族の証言を映像で記録し、その数は開館から今日までに約200本になりました。

今回の上映会では、常設展示室に展示している資料の寄贈者(戦傷病者とそのご家族)のうち、3名の証言映像を上映します。

上映場所:しょうけい館2階 シアター

上映期間:2024年12月3日(火)~2025年2月4日(火)、
2025年2月12日(水)~2025年3月2日(日)

上映時間:10:00~17:00

上映休止:12月8日(日)、1月12日(日)、2月9日(日)、いずれも13:00~14:00

家族の絆で支え合う

毎時00分
より上映

上映時間:約16分

夫は昭和14年9月30日と17年6月12日の二度にわたり中国で受傷。二度目の河南省の山岳地帯で負った右大腿部の傷は深く、北京の陸軍病院での治療の後、内地還送となった。この間、治療した右足は6センチほど短くなっていた。19年9月に結婚。戦後、農協に勤める。昭和30年代から徐々に回復にむかったが、足の痛みに悩まされていた日々であった。

展示資料:傷病恩給の支給が遅れる旨の通知

癒えない傷に耐えて

毎時15分
より上映

上映時間:約21分

昭和16年9月、中国湖南省での戦闘で受傷。銃弾は右大腿を貫通し左大腿部まで入った。ガス壊疽(えそ)となり陸軍病院で左脚の切断手術を受ける。東京第一陸軍病院で義足の装着訓練後、帰郷。実家の農業を継ぐ。わずかな畑とミカン畑で生計をたてるも、作業が思うように進まず、家族に苦勞をかけた。終戦後、脚の痛みの後遺症に苦しめられる。痛みを紛らわすために酒に走り、家族も近寄れない状態が続いた。後遺症に苦しめられた半生であった。

展示資料:証明書(傷病)、作業用義足

兄嫁と結婚してつかんだ幸せ

毎時36分
より上映

上映時間:約19分

昭和20年米軍との銃撃戦で右大腿部盲管銃創となる。米兵に救助され野戦病院に収容。傷口から膿と血が出るため、毎日ガーゼを交換。昭和26年結婚。妻は戦死した兄の嫁。妻が営んだせんべい屋を手伝った。傷口の治療時、親指の爪大の破片が2個出てきた。足のしびれに悩まされながらも、自身の努力と家族の支えで乗り越えてきた生涯を振り返る。

展示資料:摘出弾

◆上映時間以外でも、情報検索機にてご覧いただけます。◆団体プログラムにより変更となる場合もあります。